

コメント 1

貴志 俊彦 京都大学東南アジア地域研究研究所 教授

私は20世紀東アジアのメディア、コミュニケーションを中心に研究していますので、今日のコメントもそういう立場から申し上げます。どうぞ、よろしくお願いします。

■ 日中の文化的連動性を止揚して 日常的な衣装を論じる意義

今日の劉さんの報告について、まずプラス面から申し上げます。日中両国の服飾文化史研究では、中山服の事例に見られるように、いかに日本の影響が中国にあったかという文化的連動性、文化的影響のなかで論じられることが多いです。ですが、劉さんの場合は、それをある意味否定して、そうした連続性の検証ではなく、機能としての服装という面に着目して、服飾、とくに学生服の伝播の道筋を示すことで、日中間の越境性を論じるという点に着目した点を評価したいと思います。私も、資料的根拠のない文化的伝播論ではなく、モノそのものから、越境的な相互影響をとらえるという点にとっても同感している次第です。こうした視角の研究は、東アジアにおいては、フォーマルな衣服や上流社会の衣装などではときどき論じられることはありますが、学生服のような、いわば日常的な衣装について論じる研究は驚くほど少ない。そういった点ではかなり斬新な研究になり得ると思います。

■ 比較の枠組みの精査と さらなる検証の深化に期待

ただ、残された課題も、いくつかあると思います。まずは、日本、中国、シンガポールを比較しているのですが、比較の基準がよくわからないということです。コンパラティブ・スタディをするのか、あるいはトランスナショナル・スタディのなかで話をするのかということが見えないものですから、お話が羅列的になってしまっていました。個人的には、中国に絞ったほうがよかったのではないかと気がします。

また、比較論を進めるにあたって、歴史的観点が弱いとも思いました。とくに、使った資料が清末から民

国初期の資料なのですね。なぜそういう資料を使うかといいますと、その時代に中国における教育の近代化、学制、学校制度が普及・導入されていくからなのですが、導入されたからすぐ変わるものでもないのです。私が考えるには、実際にそうした変化が見えてくる最初の転換期は、やはり1910年代末の五四運動のときだと思いますし、そのあとは中国国民党が政権党となる1928年以降ではないかと思うのです。少なくとも近代では。写真資料を使う限り、そのあたりをきちんと押さえておかないと、表象というよりは、表面的な事象を印象論的に理解したつもりになってしまうと思うのです。

では、学生服のような衣装の変化をどのように捉えればいいのかと申しますと、まずは官と民とをきちんと分けましょうということです。中国の場合、大半は書院や義塾という民間の寺子屋ですね。国立の学校と違って、こうした民間の私塾では政府が指定する制服は着ないだろうということです。次に、地域性の違いというものもある。つまり、当時の中国で教育制度が進んでいたのは、長江流域と、天津や北京のような北方の大都市、さらには広州といった最南端の都市にすぎず、それら以外の地域と比べて、どの程度「制服」が普及していたのかを検証する必要があると思うのです。

例えば、日本の場合でも、明治以降の学生の近代化のなかで、学校の制服については制度化されていくわけですが、実際には1945年ぐらいまで制服を着ていたのは一部学校だけでした。ほとんどが昔ながらの衣服に袴をつけたような服であった。なにぶん、制服は高いから買えなかった人も多かった。そのあたりの日本の状況を知ると、戦前の日本が学生みんな制服を着ているという幻想はなくなり、さらに中国の制服の浸透状況もわかってくるのではないかと思います。軍服でさえ、統一されるのは、中華人民共和国成立以降なのですから。

劉さんの報告で欠けている点は、分析の枠組みのように思います。杉本先生の報告は政治、経済、文化に着目して、時代の総体から衣服を考えようと言

ていましたし、小形さんの報告では和服の技術面の展開に注目されていました。衣服の文化史を考えるには、お二人の報告で提示された四つの側面を踏まえながら、衣服の機能や変化を考えていく、そうした方法論といいますか、枠組みを大事にすると思います。衣服の変化を写真というメディア媒体で検証するという方法をさらに進めるにあたって、こうした四つの側面を同時に議論すると、ご自身の主張がよりはっきりさせることができると思います。

ただ、そこで注意しなければならないことは、私たち研究者はつねに「関係性」を求めたがるという点です。それを明らかにすることが仕事なので、仕方がないこともあるのですけども。とはいえ、関係性がない、あるいは関係性が希薄なものまで結びつけてしまう議論も、なかにはある。最初にお話しした中山服と学生服の関係についても、根拠のない議論が横行してしまっている。安易に関係性を見いだすよりは、衣服という文化媒体が置かれた時代性をしっかりみきわめることが大事だと思います。これは研究者の姿勢としてたいへんな重要なことです。「関係性がない」と言うのは勇気のいることですし、論拠のいることですから、ないことはないとしてきちんと言うことは大事だと思います。その点について、劉さんの研究者としての姿勢には感銘を受けました。

■「着物を作り替える歴史」という観点

——小形氏、杉本氏報告について

つづく、小形先生の報告でも、考えるべき課題が一点あるのではないかと思います。着物をとりあげられる場合、作る歴史だけではなく、作り替える歴史という、そういう観点も必要ではないかと思うのですね。ご存じのとおり、和服には表地と裏地というものがあります。われわれが幼少のときもそうですが、母は着古したら、裏地を座蒲団やおしめに使ったり、表地は男性用の着物に作り替えたりというように、いろいろと作り替えていく。着物のおもしろいところは、作る歴史と同時に、作り替える歴史があるということなのですね。着物を消費文化に落とし込むのではなく、日常生活の場における機能という点にも注意を払うべきではなかったかと思いました。日常的に着物が使われる、日本の最後の時代を見聞した身としては、そう思うのですね。そして、もう一つの課題は、着物に描かれたデザインの変化という面を加えていただけると、もっとおもしろかったなと思いま

す。やはり服ですので、杉本先生が指摘されたように、デザインや、描かれているものがどのように変化していくのかという点は見過ごせないと思います。そういった点を踏まえていただくと、より豊富な議論ができるのではないかと考えます。

杉本先生の報告については、ただもう勉強したということにつきます。このプロジェクトにおいても、有益な分析枠組みを提示されたこと、個人的には思っております。以上です。